香取遺産 Vol.1

「下総国の一宮　香取神宮」

千数百年の人々の物語がここにある

香取神宮は、古来より下総国の一宮として、広く人々の崇敬を集めてきました。

主祭神である経律主神は、鹿島神宮の主祭神の武甕槌神とともに武徳の祖神といわれます。

香取神宮が鎮座する利根川南岸の丘陵は「亀甲山」と呼ばれています。亀の甲羅に似ていることからその名があるとも言われます。

現在その全体が「香取神宮の森」として県の天然記念物に指定されています。

以前は楼門から西方へ続く道が表参道でした。その起点は津宮にあり、ここには現在も木製の浜鳥居が建てられています。

12年に一度、午年に行われる式年神幸祭では、ここで神輿を御座船に乗せて利根川をさかのぼり、佐原の街中などを巡行します。

香取神宮の創始

社伝によれば創始は神武天皇十八年と言われていますが、文献上では8世紀中頃に成立したと推定される「常陸国風土記」に香取神宮から分祀した社の記載があることから、これ以前に香取神宮は存在し、周辺地域に勢力を持っていたと考えられています。

香取・鹿島の両神宮は、大和朝廷の東国支配の拠点として祀られた社を創始とする説があります。これは古代においては香取と鹿島の間には、「香取の海」とも称される内海が広がっていて、外海にもつながる軍事的な要衝として見なされたことから、両社はその掌握のため置かれたとされています。

また、「海夫注文」という史料によれば、この内海にはおみがわの津・つのみやの津・さわらの津など多くの津が散在していました。そして津には「海夫」と呼ばれる漁民が存在し、香取神宮に魚介類を神饌として貢納し、神宮を航海や操船の神として信仰していたとされます。

天正18年（1590）に徳川家康が関東に入ると、翌年、朱印地として一〇〇〇石が寄進されました。

その後、江戸期を通じて社領に変化はありませんが、明治期になると旧幕府封地は明治政府に返上されることになったため、香取神宮も明治3年（1870）12月に社領を政府に上地しました。翌年5月には官幣大社の一つに列せられました。

貴重な文化財が多数

古くから正殿の遷宮造替が制度化されており、元禄13年（1700）には徳川幕府により大規模な造営が行われました。この際に建てられた本殿・楼門は、重要文化財に指定されています。

このほかにも香取神宮には多くの貴重な文化財が指定されています。特に国宝の海獣葡萄鏡は、8世紀に中国からもたらされたものとされ、正倉院御物や愛媛県の大山祇神社の神鏡と合わせ「日本三銘鏡」と称されています。千葉県の工芸品で唯一の国宝です。

国宝海獣葡萄鏡

問い合わせ　生涯学習課文化財班　☎(50)1244